

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 58

俳句通信

特別作品25句 ● 綾部仁喜「石榴」

特集 ● 〈岡本眸〉を読む

「岡本眸小論——「俳句は日記」の真意」小島健 「俳句と生きる」岸本尚毅

「日常の未知」高柳克弘 「岡本 眸——日記という文体」仲村青彦

岡本眸自選50句

新企画 ● 同時代作家を読む

高橋さえ子論……藤本美和子

ものを習う姿勢の出来ているひと

高橋さえ子作品30句「水澄めり」

● 好評エッセイ ●

新連載・飯田龍太は森である

「その作品について」清水青風
 視野遠近「わすれね」のこと 廣瀬直人
 夢「絆」倉田紋文
 伝統の探求「朔太郎と虚子」筑紫磐井
 戦後の俳人たち「岡本 眸」松岡ひでたか
 虚子の肖像「虚子の傲慢」坊城俊樹
 誓子の素粒子「下田家の嫁」品川鈴子
 時空の座・拾遺「寺田寅彦こと牛頓」西池冬扇
 ほか

作品 ● 小沢昭一・黛 執・木附沢麦青・
 加藤恵曠・森田公司・美柑みつはる・
 伊達甲女・磯直道・守谷ゆき・
 山田佳乃 ほか



【特別寄稿 30 句】

鈴木鷹夫「北上川」

【実力作家競詠 20 句】

今井千鶴子「布哇」
 山下美典「仁王門」
 五十嵐哲也「原爆忌」

四季逍遙

岡本 眸



手賀沼 2005年1月

特集

〈岡本眸〉を読む

岡本眸氏は、昭和・平成の代表的な俳句作家のひとりです。

主宰する「朝」もこの秋に創刊30周年を迎えます。

これを機会に岡本氏より若い世代4人に

〈岡本眸〉を読んでもいただきました。

藤本美和子

高橋さえ子論

ものを習う姿勢の出来ているひと

高橋さえ子氏と私はともに山下一海先生の古典講座の受講生だった。講座の果てた後の一海先生を囲んでのコーヒープレイク。先生の傍らで芭蕉や蕪村の話をつかがいながら、濃密で贅沢な十年の歳月を過ごした。

さえ子氏は寡黙で楚々とした素顔の方、というのが、私の第一印象であり、今も私のなかで変わることはない。この変わることはない、という事実がまた最もさえ子氏らしいと思われる。

さて、ここからは本論に入りたい。敬称は略させて頂こう。

高橋さえ子にはこれまでに四冊の句集がある。順に第一句集『萌』（昭和六十年刊、牧羊社）、第二句集『瀬音』（平成二年刊、牧羊社）、第三句集『緋桃』（平成九年刊、本阿弥書店）、第四句集『浜木綿』（平成七年刊、ウェッブ）である。そのほかにも自註句集が二冊。自身のことは

黙して語らず、といった風情の高橋さえ子氏の背景がこの二冊の自註から垣間見えてくるのは嬉しいことだ。たった数行の自註から醸し出される俳句作品の奥行きと厚み。読み手の自在な想像力に、新鮮で意外なスパイスが加えられるのが自註作品の妙味でもあろう。高橋氏らしい軽快な筆致もまた魅力的である。

弾きたりし琴立てかけて秋の夜
『萌』

身助けの琴糸強く締めて冬

仕事場に琴の木あまた雁渡し
『瀬音』

琴買ひに会津へ向ふ雁の秋

琴柱手に雁引く空を思ふかな
『緋桃』

三の糸よく切れ梅雨も峠かな
『浜木綿』

四冊の句集を概観すると、琴に関わる作品が各々句集の核をなしているのがわかる。それもそのはず、高橋は六歳の六月六日、箏の名手宮城道雄に就いた。この年齢に対する拘りにも、高橋の育ってきた環境がいかにほどのものであったか、容易に想像がつこう。宮城道雄は、明治二十七年（一八九四）生まれ、生後ほどなくかかった病が原因で七歳にして視力を失い、昭和三十一年六月二十五日、大阪への演奏に赴く途中、列車からの転落事故によって急逝、六十二歳だった。四冊の句集名の中の『瀬音』は宮城の曲、『浜木綿』は宮城の忌日に因んだ命名である。

泰山木開きて宮城道雄の忌
『萌』